

積み重ね つみ重ねても またつみかさね

令和4年9月12日 No. 24 文責：佐野紳二

学力の話・おまけ①

それまで、全然関心のなかったことが、自分と関係ができたり関心をもったりした途端、ニュースや新聞の記事を見たときに急に気になるということが、人にはよくあるようです。私も職業柄、教育に関するニュースは他のことよりアンテナが高いつもりではいるのですが、今回、学力のことを書いた途端、ネット上でもいくつか気になる話題を見つけました。(私にとっては) とても面白い記事だったので、この紙面でも紹介させていただきます。

今日紹介するのは、Newsweek 日本版にあった記事で、米国のグーグル本社で副社長を務めた村上憲郎氏の著書、「Google が教えてくれた 英語が好きになる子の育て方」の中から、「学力の捉え方が変化しつつある」ということを記した部分を紹介したものです。見出しには「激変する『成績が良い』の基準 — 世界に遅れていた日本の初等中等教育が変わる」という、ちょっと刺激的な言葉が並んでいました。

記事は一部を抜粋し、読みやすくなるように修正を加えてあります。

また、(青字)で記した部分は、私の個人的な考えになります。

(前略)日本でも、2020年の3月31日までに、小中学生全員にパソコンもしくはタブレット端末を配布することが決まり、実行しました。これが「ギガスクール構想」と呼ばれるプロジェクトです。「ギガ」とは、「Global and Innovation Gateway for All (グローバルな技術革新への登竜門を全員の子どもたちへ)」の意味を持つ名称です。ということで、日本の教育の世界ではすでに大きな変革がはじまっています。

初年度の2021年度は、新しい文房具(パソコン)を使いこなすのが精いっぱいでした。先生も生徒たちも、四苦八苦だったようです。しかし、徐々に、単に新しい文房具を使いこなすといった段階から、さらに先へ進み、新しい教育の試みがはじまっています。新しい教育の何が「大改革」なのかといえば、明治維新以来150年続いてきた、「先生が一方向的に何かを教える」という教育のありかたが、変わってしまうということです。

たとえば「分数の割り算をどうやるか」。従来は、先生が子どもたちに「割る数の分母と分子をひっくり返して掛ける」と一方向的に教えていました。(決してそんなことはなく、近年、日本の教員は子どもたちが自ら学ぶための授業の工夫を、時間をかけて研究してきたのですが…)

しかしこれからは、「分数の割り算をどうやるか」について、子どもたちが次の授業までに考え、スライドショーにまとめて、クラスで発表する。それから皆でディスカッションして、正しいやりかたにたどり着く。そんな流れの授業が、だんだん定着していくものと期待されています。すでに世界の初等中等教育では行われている、先生が教えるのではなく生徒が教える「反転授業」、スライドショーでプレゼンしてそれを皆でディスカッションして、正しいやりかたにたどり着く、「アクティヴ・ラーニング」が、当たり前のように日本の小・中学校でも行われるようになっていくわけです。(以前に紹介した、本校で取り組んでいる『学び合い』の考えも、これに近いものがあります)



これはじつはものすごい変化です。明治維新以後 150 年間、学校教育は先生が「自分が習ったこと」を生徒たちに教え、それを生徒たちが次の世代に引き継いでいくという形で教育が行われてきました。

いまの先生は、自分が生徒だったときに習ったことを、同じようにあなたのお子さんに教えています。その先生が子どものときに教わった先生も、やっぱり子どものときに自分の先生から教わったときと同じようにやってきました。(この主張に対しても、大いに反論はあるのですが…)

しかしこのギガスクールの時代、日本の教育のありかたは、根本的な変革を余儀なくされます。結果、起こるのは、一般的にいう「エリート」とか「成績のいい人」の基準が、いままでとは大きく変わっていくということです。これまでは、先生が一方向的に教えてくれる「正解」をできるだけたくさん頭に覚えた生徒が、「成績が良い」生徒ということでした。

しかしこれからは、違います。ギガスクールでは、成績のいい子の基準は次のようなものになります。

- ・問題を発見できる子
- ・その問題をプレゼンできる子
- ・正解があるかどうか分からない問題の正解を求めて探究できる子
- ・探究の結果をプレゼンできる子
- ・プレゼンを聴いて、質問のできる子
- ・自分の考えを積極的に述べてディスカッションできる子



10 年もすれば、このギガスクールで育った第一世代が、大学卒の新入社員として、会社に入ってきます。このように育った世代が、入社 3 年目にして、早くも会社を大変革させる。そのような状況が、この国のいたるところで起こってくるのではないのでしょうか。

「先生から教わるばかりでない教育」を受けてきた若者たちは、問いを見つけ、その問いについて自分の頭を使って考える、つまり思考する習慣ができています。

グローバルな企業の副社長をされた方の言葉なので、それなりに（なんていうと失礼ですが…少なくとも、地方の公立小学校の校長の言葉よりも）重みや説得力があると思います。これからの時代に、世界の中で求められる「学力」が、明らかにこれまでとは違ってきていることは感じ取っていただけるのではないのでしょうか。

日本の小中学校がこのような学力に完全にシフトしていくのには、もう少し時間がかかるものと思われます。それは、高校入試や大学入試で出題される問題が、このような学力観を反映して変わるまでは、もうしばらく時間がかかると思われるからです。「高校や大学に進学することだけが、その後の豊かな人生を保障しなくなりつつある」という意見も聞かれるようになってきましたが、社会全体の仕組みや人々の意識が大きく変革するにはやはり時間がかかることが予想され、それまでの間は、新しく求められる学力を身に付けることを目標にしつつも、したたかに現行の入試制度に対応していく力も必要だからです。

このネットニュースは 3 回構成になっていて、1 回目は「グーグル元副社長が教える、英語が下手な親でも子どもの英語力を伸ばせる方法」というタイトルで外国語教育について、3 回目は「子どもがすぐに『ググる』のはダメなのか？」というタイトルで ICT の活用について書かれていました。それぞれ面白い記事だったので、機会があったらご覧になってください。下の URL からアクセスできます。(ホームページ版の学校通信を活用してください) この話題、大変長くなっています…。次号を最終回にします。

https://www.newsweekjapan.jp/stories/carrier/2022/08/post-99327_1.php